



#_i_98ad4e80_#

蓮也は吐血し、その場にうずくまった。

#_i_a219cb30_#

そして、やがて意識を失った。

#_i_84c3add6_#

ヘティス

「・・・はっ！」

「蓮也のオーラが消えかかっている・・・！」

ヘティスはヘパイトスに、蓮也の救出を頼んだ。

しばらくの間、ヘティスの中で緊張が走る。

既に日が落ちていたので、ヘティスはランプに火をつけた。暖炉の火とランプで部屋は少し明るくなった。

ヘティス

(何事ありませんように・・・)

やがて、扉が開き、ヘパイトスが蓮也を運び込む。

蓮也の身体は冷え切っており、口からは吐血の跡が見られる。

ヘパイトス

「蓮也は体温がかなり低下している。命の危険性がある」

ヘティス

「あーん、もう、だからダメだって言ったじゃないの・・・！何で無茶するのよ！」

ヘパイトス

「どうすればいい？」

ヘティス

「とにかく身体を温めないと・・・」

ヘティスはヘパイトスに蓮也をベッドに仰向けで寝かせ、濡れた衣服を脱がせ、毛布をかけるように指示した。その間にヘティス自身は薪を焚べ、なるべく部屋を暖かくするようにした。部屋にはロープが横に張っており、そこにヘパイトスは衣服をかけた。

ヘティスは蓮也のエネルギーキャンを行い、胸部及び腹部のヒーリングを開始する。しかし、強いレベルの冷気が蓮也の身体に入り込み、ヘティスのヒーリングがなかなか効かない。

ヘティス

「・・・どうすればいいの。なかなか体温が上がってくれないわ・・・」

ヘパイトス



「体温低下、危険、危険」

ヘティス

「わかってるわよ・・・！だから、今、こうやって全力でやってるの！」

蓮也の心拍数や血圧、呼吸が低下して来ており、極めて危険な状態であることがヘティスにはわかっていた。しかし、どうすることもできずにヘティスは焦った。

ヘティス

(もし、蓮也が死んじゃったら世界はどうなるの・・・?)

(いや、そうじゃなくって・・・、そんな後の世界のことじゃなくって・・・)

(・・・今は、この人に生きてもらいたい、とにかく蓮也が生きていて欲しい、私の願いは、ただ、それだけよ・・・)

(お願い、神様・・・)

#_i_54744893_#

ヘティスはしばらく目を閉じ、無心の状態となったが、やがて覚悟を決めた。

ヘティス

「ねえ、へパ」

「・・・スリープ」

へパイトス

「おやすみなさい」

ヘティスの命令で、へパイトスはスリープ状態となり、へパイトスは部屋の片隅で蹲って眠った。

ヘティスは蓮也の冷えた身体から手を離すと、ランプの火を消し、自分の衣服を脱ぎ出した。

ヘティスは衣服を全て脱ぐと、ベッドの中に入り、仰向けで寝ている蓮也の冷えた身体に自分の素肌を重ね合わせた。そして、お互いの胸と胸を重ね合わせ、ヘティス自身の体温で、蓮也の身体を温めることを選択した。

ヘティス

(私、こんな姿で男の人と・・・)

ヘティスは、裸で異性と密着するなど考えたこともなかったので、表現することができないほどの恥ずかしさだった。しかし、今の状態では恥ずかしいとは言ってもらえない、そう言う思いの方が強かった。

ヘティス

(お願い・・・！死なないで・・・！)

ヘティスは目から涙を零しながら、強く蓮也の身体を抱きしめた。しかし、蓮也の体温はなかなか上がらず、心拍や呼吸が低下していくのが感じ取れた。



ヘティス

(呼吸をさせるには・・・)
(・・・どうやるんだろう)

ヘティスは自分の唇を蓮也の唇に重ね合わせた。

そして、口から呼吸を送ろうとした。その瞬間、ヘティスのハートが柔らかく暖かいエネルギーを放ち出した。そして、蓮也のハートと共鳴しだし、二人を包み込む。ヘティスは蓮也の体温が少し上がったのを感じると、少し安心した。

ヘティス

(よかった・・・)

安心し、それまでの緊張と解けると、ヘティスは力尽きたかのように眠った。

蓮也は子供になった夢を見た。もしかしたら子供の頃のことかもしれない。

声

「レン～、レン～」

蓮也

「ボクはレンじゃないよ。蓮也だよ」

声

「なんでアナタはいつも無表情なの？なんで笑なわいの？」

蓮也

「別に楽しいことなんてないし、笑う意味なんてないだろ？」

声

「いつも一人で何もしていないし、何でそんなに無気力なの？」

蓮也

「別に何もすることないしね」

声

「人生、生きてたら楽しいことがきっとあるわ！今日はお姉さんが特別に抱きしめてあげる～！」

蓮也

「やめろよ～、鬱陶しいなあ。そんなことしなくていいよ～」

夢の中で蓮也は、このような出来事があっただろうか、と自分に問いかけたが、記憶が曖昧だった。その後の夢は、光の中に自分自身が包まれていて、ただ温かかった。

しばらく時間が過ぎ、夜明け近くになった頃、蓮也は目を覚ました。そして、自分の身体に上に暖かく柔らかなものを感じた。

蓮也

(桃の香り・・・)



蓮也はヘティスの身体をゆっくりと離し、ヘティスを仰向けで寝かせ、そっと毛布をかけた。

蓮也は衣服を着ると、再び、外へと出る。

覚悟を決め、蓮也は最後のエネルギーでバリアを張る。

しばらくするとオオモノノヌシが現れる。

オオモノノヌシ

「胸に病を抱えたものよ、再び私に何の用だ」

蓮也

「俺は大切な人を、そして大切な人たちを守らなくてはいけない。それを今、心から感じた。オオモノノヌシよ、だから俺に力を貸してくれ」

オオモノノヌシ

「神に対して恐れもせず、そのものの言い様は気に入わぬが、お前の心境は一応確認した」

「それが正しければ永久凍結の滝は破壊されるが、もし無理なら命の保証はない」

蓮也

「いいだろう。神の前では神の力を見せるのが礼儀と言うもの」

再び蓮也は剣を抜き、潜在能力を解放する。

蓮也

「潜在運動系・・・、解放！」

「クンダリニー覚醒！」

蓮也の身体から螺旋状のエネルギーが立ち上がる。それは、まるで竜が天を駆けるようであった。

オオモノノヌシ

「おお、これぞまさに神の力・・・！」

蓮也

「エンチャント・ファイヤー」

「谷神よ、その永遠の眠りから目覚めよ！」

蓮也は、永久凍結した滝の一番上まで跳躍し、そこから下まで大きく薙ぎ払った。すると、その巨大な氷結群は轟音とともに崩れ出した。

オオモノノヌシ

「見事だ。覚えておくがよい。技は心境なり。心境なき技は技ならずなり、と」

蓮也

「技は心境なり・・・」

オオモノノヌシ

「そして、七輪山のオオモノノヌシは、お前の力になることを約束しよう」



そう言うとオオモノノヌシは白い光と共に消えた。そして、吹雪は静まり、冷気は穏やかになり、雲の隙間から光が差し、蓮也を祝福するように照らし出した。そして、蓮也の中心部であるエネルギーセンターから、白い光が立ち上がる。
ヘティスは外から聴こえる轟音によって目を覚ました。部屋を見渡しても蓮也がいない。急いで服を着て外に出ると、蓮也が白いオーラで輝いているのが見える。ヘティスは蓮也に走り寄り、そして抱きついた。

ヘティス

「心配したんだから・・・、本当に心配したんだから・・・！」

蓮也は何も言わず、ヘティスの頭をやさしく撫でた。
その時、蓮也は自分でもわからないくらいであるが、ほんの少しだけ微笑んでいたかもしれない。

#_i_07f77d89_#